Comment les onomatopees japonaises se traduisent-elles en francais?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5260

金沢大学文学部論集　文学科編　第16号
1996年　65－80

擬音・擬態語の仏訳について

内田　洋

日本語はオノマトペを豊富にもち、それらが話し言葉においてのみならず、書き言葉においても多用され、特に文学作品においてはその表現価値が重要な役割を演ずることがある。新たなオノマトペ語彙が創造されることも、しばしば見られる。これとは対照的に、現代フランス語では、オノマトペが個人の発話行為において日常的に創造されるなどという事態が考えられず、また漫画のような場合を除けば、話し言葉においても書き言葉においても、オノマトペの使用は極めて稀だと言っていい。

フランス語におけるオノマトペの地位のこうした低さのためか、その種類や性質に関する研究はまだ豊富とは言えない状況のようだ。また日英対照オノマトペ辞典は数種類ある［注１］のに、日仏対照辞典は今のところ存在しない。網羅的・体系的であることからほど遠い数種類の和仏辞典に、ごく限られた数の擬音・擬態語が見出し語に登録されているだけである。しかし一方、日本文学の重要な諸作品がつぎつぎに仏訳されつつある。翻訳作業の現場では、日仏両言語の間のこの面での懸隔を、人はどう克服ないし迂回しているのだろうか。端的にいって、日本語の擬音・擬態表現はどう翻訳されているのか。これらの仏訳書における日本語オノマトペの具体的な処理例を集積してみるだけでも、理論的研究に資するかどうかはともかく、少なくとも実用的な意味では大いに参考となるだろう。ここではそうした徹底調査・収集作業を開始する前に、選ばれた２編の資料体における実例について、若干の分析と考察を加えることにした。

調査対象としたのは、日本人訳者による芥川竜之介『地獄変』［注２］と、フランス人訳者による宮澤賢治『貝の火』［注３］の仏訳である。前者は日本語の理解・把握に関しては万全であろうし、後者は逆に、フランス語の表現効果の判断について正確であろうという理由からの、これは意識的な選択である（もっとも、両者ともに適切な協力者が多少とも関与した、日仏の共同作業の成果であるにちがいないのだが）。

Ⅰ　芥川竜之介『地獄変』における擬音・擬態語

このテキストには50種類、延べ65例のオノマトペの使用を指摘することができるが、オノマトペとみなすかどうかの判断の迷いは常に避けられないものである。オノマトペを語基としていても、既に一般の副詞や動詞として語彙化がすすみ、オノマトペとほとんど意識されていないものがあるからである。たとえば、このテキストに多く見られる、漢語から借用された擬態語(いわゆる擬似オノマトペ[注4])をどう扱うべきか。「転々と」「粉々と」「悠々と」「炎々と」「烈々と」「歴々と」などがそれである。やまとことば起源の「ありありと」「恐る恐る」などは除外することも許されそうだが、ここでは同音の反復という形式的特徴と擬態表現であることを考慮して、考察の対象とした。「はためかす」「ぎょっとする」「ぐずぐずする」や「ぐるぐる巻き」のような、擬音語根の語彙や擬音語＋動詞（名詞）の複合語も含めたことを断っておく。

このテキストの一つの特徴と言ってもよいのだが、これほどオノマトペが豊富に用いられながら、擬音語とみなしうるものは稀で、せいぜい、「しくしく」「すやすや」「ざぶりと」「ばさばさと」、それに語基として擬音語を含む「はためかす」くらいであろう。擬態語（擬情語、擬容語を含む）［注5］が圧倒的に多い。擬態語をもたないと言われているフランス語にこれらがどう翻訳されているか、その様態を分類整理しながら検討してみよう。

1）まず、日本語の擬態語がフランス語の単一の副詞に訳されている場合で、

・じろじろ眺める→regarder attentivement
・そっと撫で上げる→caresser doucement
・こそこそ引き下がる→se retirer furtivement
・ありありと目の前へ浮かんで来る→apparaître à qn clairement
・恐る恐る頭を挙げる→relever timidement la tête

等々、このタイプが最も多い。擬態語の音象徴性はあまり生かされていないと言うべきだろう。

2）勿論、擬態語がフランス語の単一の副詞ではなく、副詞句に訳される場合も多い。

・ちゃんとその枕元に座りこんで→assis à demeure au chevet de la malade. . .
・屏風がぐるりと立て廻してあった→se dressait, largement ouvert en cercle, le Paravent en question.
・体をぐるぐる巻きにする→ligoter le corps à plusieurs reprises

・そっと遣戸の外へ身を寄せる→s'approcher de la porte de communication, à pas feutré

・べたりと畳へ両手をつく→laisser tomber ses mains sur la natte sans façon

・つかつかと車に近づくと、... 簾をさらりと揚げて見せる→s'approcher du char à pas rapides et, d'un coup de main, soulever le store

・良秀の方をじろじろ睨めつける→dévisager Yoshihidé avec dédain

これらの例では、副詞句と動詞の組み合わせも重要で、両者が一体となってはじめて日本語の擬態語との等価性が実現するように思われる。縄をぐるぐる巻きつけるというような場合には、enrouler une corde autour de qch と表現できるだろう。つまり、動詞 enrouler の意味要素の中に、「ぐるぐる」の意味要素が部分的に含まれていて、副詞句は必要がなくなる。このような極端な場合を 4）として、後述する。また同じ「じろじろ」でも、好奇心をもって眺めるのと、侮蔑の念をこめて睨むのとでは、動詞—副詞句の組み合わせが当然変わる。

3）擬態語が主語の同格形容詞、または付加形容詞に訳されている場合

・あの往来の死骸の前へ、悠々と腰を下ろして... →assis imperturbable devant un cadavre abandonné dans la rue. . .

・弟子は... 恐る恐る師匠の顔を、覗くようにして透かして見ますと... →Le disciple. . . intimidé, épia de biais le visage de son maître. . .

・朦朧とした異形の影が、屏風の面をかすめてむらむらと下りて来るように見えた→il eut l'impression qu'une ombre étrange et vaporeuse s'allongeait, informe, sur la surface du Paravent. [ただし、おそらく訳者は付加形容詞 étrange et vaporeuse と同格形容詞 informe との相乗効果に頼っている。]

・ぼんやり春の近い空を眺めている師匠→le maître, tout pensif, . . . regardait le ciel annonçant le printemps. . .

これらはある行為の付帯状況を表す同格形容詞となった例だが、以下の 2 例では原文の構文は大きく変形して、擬態語の意味要素が付加形容詞によって表現されている。

・どこか近くの部屋の中で人の争っているらしいけはいが、慌ただしく、又妙にひっそりと私の耳を脅かしました。→. . . un bruit sourd venu d'une chambre voisine où des gens semblent se quereller, bruit à la fois agité et étrangement discret, vint surprendre mes oreilles. [ひっ

そりした音]

・もうもうと夜目にも白い煙が渦を巻いて→les épaisses fumées blanches, visibles même dans l' obscurité, s' élevèrent en tournoyant. [もうもうたる煙]

4）日本語の擬態語＋動詞（特に「する」）が単一のフランス語動詞に還元される場合もある。

・転々と苦しむ→se contorsionner

・ぎょっとする→s'affoler

・ぐずぐずする→hésiter

・ぶつぶつ呟く→marmonner（擬音語根 marm-）

・ちらちら光らせる→étinceler

・しくしく泣く→sangloter（en silence）

・ちらちらと光る→chatoyer（ça et là）

最後の2例における動詞と副詞句（en silence, ça et là）の関係は、やや冗語法的か、さもなければ強調的で、いずれにせよ副詞句は省略可能と思われる。一見、訳者が擬態語を無視して、訳さずにおいているように思われる場合も、むしろ擬態語が動詞の本質修飾詞でしかないと見なされるからであろう。次のような例はどうだろうか。

・すやすや寝入る→plonger dans le sommeil

・（蛇が）きりきりと自分の体へ巻きつく→se tordre sur lui-même

同じ「きりきり」の用例でも、別の箇所では、s'enrouler fortement autour de qch となっている。つまり「ぐるぐる巻きつく」その力や度合いが「きつく」なると、「きりきり巻きつく」ということになる。これによく似たケースと言えるが、擬態語が動詞のではなく副詞の本質修飾詞と見なされ、その副詞だけで十分に様態を表し得ていると言えることがある。つまり、日本語において

5）擬態語が他の副詞と同語反復関係にあり、あえて訳されない場合である。

・邪険にぐいと引く→tirer brutalement

・ごろりと横倒しに倒れる→s'écrouler tout de son long

これらの例で、ぐいと引くとは、まさに邪険に引くことではないか。ごろりと倒れるとはまさに横倒しに崩れ落ちることではないか。典型的な例は「（彼女が）袖を軽そうにはらりと開きますと...」elle ouvrit légèrement sa manche... で、「はらりと」=「軽そうに」なのだ。擬態語の仏訳の要点は、

それをまず多少とも概念化された様態副詞に置換することだ、と言えるかもしれない。その特殊例をいくつか検討してみよう。

・にやりと気味悪く笑いながら→avec un sourire sinistre

これも「にやりと」=「気味悪く」と考えた結果であろうが、擬態語の意味要素が形容詞＋名詞に転換（にやり→不気味な笑い）されている点に特色があり、擬態語の翻訳の一典型をなしていると言える。

・ぼんやりと灯をともして→à la lueur de la lampe

この例では擬態語の意味要素は形容詞＋名詞（淡い光）に転換され、さらにそれに相当する単一のフランス語名詞へと到達したものと推測される。様態副詞としての擬態語はフランス語の副詞句に訳されることが多いが、その意味要素は句を構成する形容詞や名詞に吸収されることがあるということだ。次に、

・蛇の尾をつかまえて、ぶらりと逆様に吊り下げる→élever le serpent en l'air, la tête en bas

について考えてみよう。「ぶらりと」は垂れ下がるさま、「ぶらぶらと」は垂れ下がっているものが揺れ動くさま（広辞苑）だから、吊り下げられた蛇に動きは乏しく、下になった頭自体の重みで、長々と静かに身を持しているようだ。したがって「ぶらりと」とは、多少とも長い物を吊り下げる行為そのものに本質的に随伴する様態であり、その意味要素は「逆様に」や「下げる」の中に既に潜在していると言えそうだ。しかし、フランス語で動詞 élever（持ち上げる）を使う以上、方向が逆になって「ぶらりと」の語感は消滅する。その代わり、en l'air（虚空に）という句によって「ぶらりと」のもつ不安定性という意味要素を表出し、かつ la tête en bas（逆様に）を構文の末尾に蛇の尾のように付すことで、重力への無抵抗を訳者は演出した。つまり「ぶらりと」という語彙の欠如を、「蛇を虚空に持ち上げる、頭を下に」と言うことでのりこえようとしたのだ。

勿論、翻訳がこのようにして常に何らかの代替手段を見出すことに成功するわけではない。訳者がそれをあえて訳す必要を感じなかったか、あるいはフランス語によって適切にそれを表現する手段をついに見出しえなかったかは不明だが、少なくともわれわれが原文と訳文を比較して、

6）訳文に擬態語へのいかなる対応も欠落していると感じられる場合

をいくつか検討してみよう。

・大風に吹き散らされる落葉のように、粉々と四方八方へ逃げ迷う→fuir en tous sens, telles des feuilles mortes dispersées par une bourras-

que

訳者はここで、「粉々と」を「落葉のように」や「四方八方へ」という副詞句に加えることは冗長に過ぎる、それは既にこれらによって明白だ、と判断したのだろうか。

・思い切って... 水を、ざぶりとあの男の顔へ浴びせかける→se décider à asperger le visage du maître avec l'eau. . .

特別な理由がなければ、擬音語を文章中に提示することがないフランス語で、Plouf! のような擬音語をここで挿入したとすれば、滑稽の感を免れなかったにちがいない。

・どこから出したか、細い鉄の鎖をざらざらと手繰りながら→Se saisissant d'une chaîne qu'il avait sortie d'on ne sait où. . .

この擬音語もまったく訳されずにおわっている。これに対して、極めて幸運な例だが、

・その度にばさばさと、凄まじく翼を鳴らすのが... →Le battement furieux des ailes renouvelé à chaque assaut. . .

では、le battement des ailes（羽ばたき）という語音自体が、激しい羽音を喚起してくれる。「片方の翼ばかりで苦しそうにはためかしながら...」se débattant péniblement d'une seule aile の場合も同様である。しかし、以下の諸例では工夫の余地がありそうに思われる。翻訳不可能なほど特異なニュアンスとは思えない。

・侍は... きっと良秀の方を睨みました。→le guerrier robuste. . . arrêta son regard vers ce dernier.

・めらめらと舌を吐いて... 立ち昇る烈々とした炎の色... →Les couleurs des flammèches qui s'élevaient en langues de feu. . .

前者については、son regard farouche としたらどうか。後者の「めらめらと」は、跳ね躍るような炎の動きを表している、とすれば、たとえば furieusement はどうか。因みに、各種の和仏辞典[注 6]は、「めらめら燃える」に flamber ; flamboyer ; s'enflammer などを当てているにすぎない。つまり「めらめらと」は、動詞「炎をあげて燃える」の本質修飾詞として扱われていることになる。また「烈々とした」に相当する語句もないが、補うことは容易だろう。

・そうして朱塗のような袖格子が、ばらばらと焼け落ちる中に... →Et, à travers les cadres du portillon laqués de rouge s'écroulant en feu et fumée. . .

この例では一見、擬態語が無視されているようにも見える。しかし「ばらば

らに崩れ落ちる」ならば s'écrouler en pièces であろう。焼け落ちるとは、火と煙に分解して崩れ落ちること。そう考えれば、ここで「ばらばらと」を様態副詞から結果副詞「ばらばらに」へ置換した上で、訳者はこの火と煙によって擬態語をほぼ完璧に訳し得たと言えるだろう。

最後に、このような語の機能の僅かな変更にとどまらず、

7）日本語の構文にまで及ぶ発想の転換を要する場合、について見てみよう。

・御庭に引き据えた檳榔毛の車が、高い車蓋にのっしりと暗(やみ)を抑えて...
→Et le char toituré de feuilles de palmiers, placé au milieu du jardin, avec son toit haut et massif, s'imposait de sa présence dans l'obscurité.

「のっしりと」は一般的に流通する擬態語とはいえず、作家の新造語に属するだろう。ただし、「のっそり」や「どっしり」との近似性が感じられるので、厳密な定義はともかく、理解可能な語ではある。これを訳者は牛車の威圧的な存在感と解したらしく、s'imposer de sa présence によって、また原文にはない語を添えた車蓋の形容 son toit haut et massif によって、複合的に表現しようとしている。原作者に劣らず創造的な訳者の力業と言うべきだ。

・林泉をつつんだ暗がひっそりと声を呑んで、一同のする息を窺っていると思う中には、ただ微かな夜風の渡る音がして... →Dans le silence profond, si profond qu'on aurait pu distinguer la respiration de chacun, et dans l'obscurité qui enveloppait les bois et les sources, s'entendait seulement le souffle du vent nocturne. . .

闇が声を呑むというメタファーを直接的にフランス語に置き換えるのは大胆過ぎる、と訳者は判断したにちがいない。その時彼は、静寂の中、そして闇の中に、と分解するほかはなかった。その結果、「ひっそりと... 息を窺っていると思う中に」が「一同の息遣いさえ聞きわけられそうなほど深い静寂の中に」と訳され、静寂とは無関係なものとして闇への言及がこれにつづくことになった。しかし、闇はここで人々の声を呑むばかりでなく、みずから息をひそめて人の息遣いを窺っているのだ。訳文が魔物じみた闇の実体感を希薄にしている点を残念に思う。

・（眼の中と云い、唇のあたりと云い...）良秀の心にこもごも往来する恐れと悲しみと驚きとは、歴々と顔に描かれました。→. . . tout témoignait de la peur, de l'accablement et de la surprise qui alternaient au fond de lui-même.

これらの語彙を擬態語として扱うことに疑問があることは最初に記したが、その議論は別にして、この例で「こもごも往来する」は alterner、「歴々と描かれる」は témoigner というふうに、動詞一語に還元されている。しかし、もっと注目に値するのは、交代する内面の諸感情という構文の主語が、フランス語では目的補語に転換され、顔面の表情の変化を主語とする、この主客転倒（つまりは受動態から能動態への転換）によってはじめて témoigner（歴々と示す）という動詞を用いることが可能になったことである。

最後に、瞬間的な運動の様態を表す「さらりと」「さっと」「ぱっと」「ちらっと」「じろりと」などの語彙は、しばしば単数不定冠詞＋名詞を含む副詞句で訳される、という共通特徴を示す。一撃で、一挙に、一瞥で、等々の句に相当する擬態語である。たとえば、

・庇についた紫の房が、煽られたようにさっと靡くと... →Les glands violets de l'auvent furent soulevés comme par une rafale. . .

これは「一陣の風に」煽られたように、と原文にない語句を補うことで「さっと」の瞬間的運動性を表現している。同様に、

・するとその夜風が又一渡り、御庭の木々の梢にさっと通う——と誰でも思いましたろう。→On crut entendre encore un coup de vent à travers les arbres du jardin.

ここで「一渡り」と「さっと」は重複していて、どちらかは省略可能だと感じられる。

・火の粉が一しきり、ぱっと空へ上ったかと思う中に... →. . . tandis qu'un jet d'étincelles s'élevait dans le ciel. . .

やはり「一しきり」が un jet d'étincelles（火の粉の噴出）というフランス語表現を想起する契機となる。ほかにも une bouffée de colère や d'un coup de main など、応用範囲は広いと言えよう。

II　宮澤賢治『貝の火』における擬音・擬態語

資料が児童文学の作品であることから十分に予想されたことだが、角川文庫版26頁中に60種の擬音・擬態語が使用され、その多様性と頻度にまず驚かされる。特に擬音語が20種あまりも見られる点は、擬態語が圧倒的に多い『地獄変』に比して、この資料の際立った特徴となっている。そこで、この節では擬音語の仏訳に的をしぼって検討してみよう。

擬音語か否かの区別も、やはりかなり微妙な場合があり、同じ語が擬音語

としての用法と擬態語としての用法を共にもつこともある。しかし「がたがた」震える、目を「ぱちぱち」させる、人が「ぞろぞろ」歩くなどというのは、ある程度自然の音声を模倣してはいるが、ここでは擬音語とは見なさなかった。一方、野菜が「ぱりぱり」している、という用法では、本来は擬音語でも質感の表現でしかないと言えるし、胸が「どきどき」するというのも、必ずしも心搏音を表現しようとするものではない。しかし擬音の効果をぬきには考えられないので、これらは考察の対象に加えた。

擬音語の翻訳の最も直接的な様態は、勿論、

1）日本語の音声をほぼ忠実に引用ないし模倣する場合、である。

・「ブルルル、ピイ、ピイ、ピイ...」とけたたましい声がして、うす黒いもじゃもじゃした鳥のような形のものが... 流れて参りました。→ Bururuu, pii, pii, pii. . ! Quelque chose d'embroussaillé et de vaguement noirâtre arriva sur l'eau. . .

この例は原文において既に、自然音の模倣・再現であることを強調するように「　」が用いられているが、同時にそれがその未知の物の発した一種の言葉であることを示しているのではないだろうか。その音声形態は特異なものではなく、すぐに理解可能なほど擬音語として一般的なものである。「... とけたたましい声がして」と「鳥のような形の」はフランス語に訳されていない。後者の省略は、引用された音声によってそれが鳥の声であることがフランス人読者にとっても余りに明白だからであろうか。こうした自然音の再現は、劇的な情景の提示に寄与し、臨場感を強める効果がある。したがって、読者には最初それが何であるかがわからない程に、多少とも異様な音声であっていいのだ。

「ははははは、ご覧なさい...」Ah, Ah, Ah! Regardez-moi ça. . . に見るような、人の言葉の直接的な引用における笑い声や叫び声の扱い方に比較して、これはいわば自然音の直接話法だと言うこともできよう。その時、音源となった物体は多少とも擬人化されているのかもしれない。

・その時、空からヒュウと、矢のように降りて来たものがあります。→ A cet instant précis, quelque chose descendit du ciel comme une flèche.

・珠は... ヒュウと音を立てて窓から外の方へ飛んで行きました。→Le joyau. . . lança un Hyâ! et s'envola par la fenêtre.

この二例を比較すると、前者には擬音語に相当する語句が訳文に見られない。音源は親ひばりで、実際にその通りの音を発したわけではなく、「矢のように」

という常套句が引き出す一種の擬態語と見るべきかもしれない。これに対して後者では、不思議な宝珠がその通りの音を発して飛び去ったことを演出する効果音が問題なのである。たぶんその音は未知のメッセージとして読者に聴き取られなければならない。

しかし、日本語の児童文学テキストにおいて頻繁に見られるこうした自然音の直接話法は、フランス語の文章表現においては例外的と言わねばならない。以下、擬音語の間接話法の諸様態を見ていこう。

2）擬音語根をもつか、特別な種類の音に関連したフランス語を対応させる場合。

・一本の小さな柳の枝が出て、水をピチャピチャ叩いておりました。→ . . . pointait justement une petite branche de saule qui frappait l'eau en clapotant. [clapoter（打ち寄せる水が音を立てる）←乾いた音を表す擬音語根 klapp-]

・パチパチパチッと烈しい音がして... →Une violente crépitation suivit et. . . [crépiter（銃声・拍手・窓を打つ雨音のような、乾いた音を立てる）]

・今度はそこらにピチピチピチと音がして... →mais il y eut un pétillement. . . [pétiller（火の中で物がはぜたり、泡がはじけるような音を立てる）]

・鈴蘭なんかまるでパリパリだ。→Le muguet est tout croustillant. [croustiller（固いパンや菓子を噛むような音を立てる）]

3）似た音を発する事物によって連想させ、または必然的にその音を伴う行為を示すにとどまる場合。後者においては、事実上、日本語の擬音語＋動詞が単一のフランス語動詞に還元される。

・鈴蘭は、もう前のようにしゃりんしゃりんと葉を鳴らしませんでした。→Les muguets ne faisaient plus résonner leurs feuilles avec un son de clochettes.

日本語では鈴蘭は当然鈴の音を発するはずだ。それを訳者は clochette という名詞を明示することで連想されている。ただし、Clang clang! や Ding dong! といった擬音語を使用することも可能だっただろう。

・霧がポシャポシャ降って... →Le brouillard laissait s'écouler des gouttes. . .

この例では、霧が水滴となって流れるという事態を提示することで、雨音のポタポタではない曖昧かつ微妙な「ポシャポシャ」を喚起しようとしている

のだろうか。これと同様の例に、「草の露がバラバラとこぼれます。」Quelques gouttes de rosée s'écoulaient des herbes. があるが、こちらは一層明瞭に水滴のこぼれる情景を喚起している。しかし、水滴の数を意識させる表現(Quelques gouttes) によって、擬音語というより擬態語としての「バラバラと」が前面に出ているように思う。

これらに、「ヘンと笑う」ricaner、「わっと泣き出す」éclater en sanglots、胸が「どきどきする」battre si fort、「フッフッと息をかける」souffler dessus、鳥が「ばたばたする」battre des ailes といった例を比べると、本質的に両者が同じであることがわかる。相違点はただ、擬音語がここでは名詞にではなく動詞に、いわば吸収されていることだけだ。「ヘンと笑う」ことが即ち嘲ることでしかないから、「嘲る」とだけ訳せばよいということになる。また次の諸例では、やはり音声を再現・模倣することなく、

4）音声の特徴についての多少とも抽象的な規定にとどめて、それを連想させようとする。前項との相違は、一方で具体物によらない点、他方で音への直接的な言及がなされる点にある。

・そこには冷たい水がこぼんこぼんと音を立て... →L'eau froide coulait dans un murmure. . .

流れる水に関して、その「つぶやき」と規定することである種の音を連想させようとしているのだが、日本人なら「さらさら」や「ちょろちょろ」を想起するであろう、「こぼんこぼん」のような特異な音声は、特異であるがゆえに擬音語として出現する必要があったのだ。フランス人は小川や風や木の葉の murmure をどう聞いているのだろう。辞典によればこれは擬音語源の語彙だから、やはり「ミュルミュル」と聞いているというべきか。

・狐は地面を... とんとんふんでみたりして... →Le renard frappa le sol de ses pattes avec un bruit sourd. . .

地面を足で frapper するのを、鈍くこもった音を立てて、と修飾している。ここは兎が地中のもぐらの家を脅かす場面だから、扉をノックするという意味があるこの動詞の選択はふさわしい。また虚ろに響く音ではないことを明言することで、地中に確かに何者かがひしめき、潜んでいることを推測させる効果がある。この後テキストには、「狐は足をどんどんしました。」と、「とんとん」の派生形が現れるが、これは Le renard frappa fortement du pied. と訳されている。両者の意味の差は衝撃の強さにあるのだ。

・貝の火は鋭くカチッと鳴って二つに割れました。→. . . le coquillage de feu émit un bruit sec et aigu et se coupa en deux.

・おしまいにカタッと二つかけらが組み合って... →Finalement, les deux fragments se joignirent avec un bruit sec et. . .

上に見るように、「カチッ」と「カタッ」を、フランス語は共に乾いた音ととらえているが、両者の差は前者がより鋭い音である点にある。原文もそのことを明言しているが、言わずもがなであっただろう。一方フランス語訳は、前者を「乾いた、鋭い音」と規定することで、後者との差を明示しなければならない。

擬音語の処理の仕方としては特異な例を次に指摘しておこう。

・りすがきゃっきゃっ悦んで仕事にかかりました。→Tout contents, les écureuils se mirent au travail.

これは「きゃっきゃっと悦びの声をあげながら」と解すれば擬音語であろう。En poussant un cri de joie. . . などと訳すことができそうだ。しかし訳者は擬音語を無視して、主語の同格形容詞 Tout contents（すっかり悦んで）で片づけている。

擬音語の翻訳の様態をやや詳細に検討してきたが、それが特別に重要な機能をもち、意図的に多用されている児童文学のテキストにもかかわらず、総じてフランス語訳はこれを几帳面に再現ないし引用することはしていない。

最後に、40種にのぼる擬態語についても簡単に触れておく。まず注目されるのは、その約半数が動詞に吸収還元されて、フランス語訳文の表層から消えていることである。たとえば「にこにこ」する→sourire、「ぞっと」する→frémir、「くるくる」回る→tourner、「ぴょんぴょん」駆け出す→sautiller の類である。これらを比較して、擬態語の表現価値がフランス語動詞によってどの程度生かされ、あるいは抹消されているかを測定することは難しいが、この場合、訳者はフランス語の音の象徴性に頼るほかはないだろう。frémir における/fr/は、確かに「ぞっと」に対応する表現価値をわれわれに感じさせるのだが、「くるくる回る」と「回る」の間で失われる何かは、tourner においてもやはり欠落しているような気がする。稀には「よろよろ」する→tituber のように、擬音語源のフランス語動詞を対応させる例が見られはするが、こうした幸運にしばしば恵まれるわけではない。

ところで、擬態語にも同音異義があり、同形の語がいつも同じ意味・機能をもつわけではないことは、次の例に見られる通りである。

・火がもくもく湧いている。→Le feu bouillonne et bouillonne.

宝珠に浮かぶ火の色を、沸き立つ液体になぞらえて bouillonner を用いている。擬態語はほぼこの動詞に還元されているが、動詞を反復することで一層

「もくもく」の表現効果に近付けようとしているのだろう。原文は単に「火がもくもくしている。」でもよかったかもしれない。

・すると足の下が何だかもくもくしました。→juste à ce moment, quelque chose bougea sous ses pieds.

この「もくもくする」は「もくもく動く」の意味で、「むくむく」の異形と見られる。

・それは黄色でね、もくもくしてね。→C'est jaune et tendre.

先の2例で、「もくもく」はある柔弱な動きを表しているが、ここでは柔和な形状、さらには触感である。したがって、動詞ではなく形容詞に訳される。

これに対して、頻繁に現れる「じっと」の場合は、意味・機能が同一でもその訳され方は多様だ。「じっと見つめる」は contempler fixement だが、「じっと黙りこむ」や「じっと考える」「じっと待ちかまえる」は、rester silencieux、réfléchir、se mettre en position d'attente など、擬態語はそれぞれの動詞に吸収されてしまっている。逆に、形も意味も異なる擬態語に、その差を示すことができず(本当に差はあるのだろうか？)、同じフランス語を充てる場合もある。たとえば「がたがた」「ぶるぶる」震える、に対する trembler de tous ses membres や、「きらきら」「ちらちら」光る・燃える、に対する scintiller などがそうだ。

擬態語が副詞（句）に訳される場合は当然ながら多く、興味深い例も見られる。その中から、「ぞろぞろついて行く」suivre á la queue leu leu だけを取り上げておく。こうしたフランス語の成句には、日本語の擬態語とぴったり対応するものがほかにもいくつかはありそうだ(「えっちらおっちらやって来る」arriver cahin-caha とか「てんでんばらばらに寄せ集める」assembler qch de bric et de broc のように)。それらはまだ仏和辞典の大海に散乱したままの状態で、われわれがそれらに遭遇するのはほぼ偶然に委ねられている。

フランス語の形容詞に訳された擬態語の稀な例（3例）のうち、先に「もくもく」を挙げたが、ほかに、付加形容詞と化した次の2例があることを記しておく。

・陰気な霧がじめじめ降る→Un sombre brouillard humide tombe.

・鼻がせらせらする→avoir le nez irrité

「せらせら」は聞きなれないが、作者の特異な造語または地方的な特殊形であろうか。

以上のような調査をさらに多くの資料体について行えば、オノマトペの翻

訳の様態は限り無く多様化するだろうとは思えない。擬態語・擬音語それぞれについて、上の分類整理は主要な類型をほぼ尽くしていることだろう。いわばオノマトペの翻訳手法として、われわれはこれらのうちどれが最もふさわしいか、あるいは可能であるかを、コンテクストに即して考え、試みることができる。日本語の擬音・擬態語は、対象の特徴的な音声や様態をまざまざと実感させるべく、対象を模倣・再現するその機能のために選びぬかれてそこに用いられ、時には特別に案出されている場合がある。こうしたコンテクストでは、翻訳は是非ともその語の特異な表現価値をフランス語の内部で強調しなければならない。つまりは強調的な諸手段をとらねばならない。それが擬音語なら、音と意味の連関（語音のもつ象徴性）が異なるフランス語では、結局、それを翻訳するよりも引用するほかにない。しかしまた、擬音・擬態語の多くは他の語句（動詞や副詞）に常套的に付随する、それらの語句の一種の本質修飾詞にすぎず、たかだか重複的な仕方で類型的な情感や意味を強調しているだけだ。こうしたコンテクストでは、オノマトペをそれに対応する何らかの方途をもって是非とも翻訳する必要はなく、おのずから適当な動詞や副詞に還元吸収されることになる。ただしこれは語彙によってではなく、あくまでコンテクストによって決まる。「ヘン」という一種の笑い声は、Hum! Hem! Peuh! などと「訳し」うる音声であり、そうすることが必要な場合もあるが、それが軽蔑や無関心を示す笑いを意味するだけなら、「ヘンと笑う」は ricaner と訳せば足りるのである。

日本語オノマトペをほぼ忠実に引用することと、それが既に他の語彙に十分に含有されているがゆえに事実上それを無視すること、こうした翻訳手法の両極端の間に、さまざまな直接性の度合いにおけるフランス語の語彙的対応が見られるわけである。多くの場合に副詞や副詞句が対応するが、それは様態・結果・程度・頻度の副詞として機能する日本語オノマトペが多いことからすれば当然であろう。しかしまた形容詞や名詞によってかなり迂回的な仕方でオノマトペの意味要素が引き受けられなければならない場合や、擬態語＋動詞が単一のフランス語動詞に対応するケースも多い。その際、オノマトペの豊富な日本語からそれが極端に乏しいフランス語への翻訳は、常に多少ともオノマトペの具体的な喚情機能を抽象的な意味に還元することになる。その典型を「うらうらした日差しの下で」sous un doux soleil に見るならば、「うらうらした」はほぼ「温かく穏やかな」という意味でしかなく、われわれはこれをオノマトペの概念的翻訳と呼ぶことにしたい。したがって、対象や事態の感覚的性質を具体的かつ鮮明に喚起するオノマトペの特質を喪

失しない翻訳は極めて稀だというほかはない。対応するフランス語の成句が擬音・擬態表現である場合とか、擬音語根の語彙が見出される場合がそれである。もっと稀には、動詞の反復や同格語法、倒置法、後置法などの特異な統語的手段が講ぜられる。これは語彙的対応という観点からは最も間接的に見えるが、文章構造そのものによって事態を鮮明に演出してみせる一種の模擬行為である場合には、むしろオノマトペの本質に忠実な創造的翻訳だということができるだろう。ただしこれも、そうすることが適切かつ必要かどうかはコンテクストによるのである。

われわれにとって望ましい理想的な日仏対照オノマトペ辞典とはどのようなものであろうか。両言語それぞれに固有の擬音・擬態語の目録を作成し、対応関係の有無を明示するという方式がまず考えられ、これは比較的容易に実現できるだろう。擬音語やその派生語には、「きんこんかん」と Ding, ding, dong!、「ぴいぴい鳴く」と pépier のような対応関係が相当数認められるだろうが、擬態語に関してはそれは極めて稀なことであろう。しかし一般的には、日本語オノマトペをフランス語にどう翻訳するかを示した仏訳例解集が目指され、すべての項目に何らかのフランス語表現が対応させられる。そのかわり、それらは既に見た通り、しばしばフランス語のオノマトペでは全くない。結局それは、既存の各種和仏辞典と同様のものとなり、それに対する不満は無数にあるが、それを解決する方策が容易には見出せない。たとえそれが考えられても、実現の可能性が無かったりして、辞典の理想形態を言うことが既に相当に難しくなる。しかし、ともかくもわれわれが着手したように、既存の仏訳書を原典に比較参照して、日本語オノマトペとその訳例をできるだけ多く収集することが、まず第一に必要だろう。それをもとに、それぞれの語彙の正確な意味分析と豊富な用例を提示することが望ましい。意味分析の中には、その語彙の使用される状況（文体やジャンル、言語レベルなど）に関する記述も含まれるべきだろう。しかし、「きらきら」「ぴかぴか」「ちかちか」のような類義語の意味や表現価値の差をどれほど厳密に規定できるだろうか。仮にそれができたとして、その差に応じたフランス語訳を提示できるとは限らないし、その訳例がどんな使用状況においても適切とは言えないのである。第二に、日本語オノマトペは基本形から体系的な音変異を示しながら一連の派生形をつくることができるという特徴をもっているので、そうした音と意味の関連の体系性を明確にした辞典の形態が望ましい。たとえば、「ふらふら」「ぶらぶら」「ぷらぷら」のような清音・濁音・半濁音の交替や、「ころ」「ころっ」「ころり」「ころん」のような語末音の交替を示すものを、

個々別々に扱うよりも語家族として同一項目内で記述すべきだろう。これらの基本形・派生形と共に、オノマトペを語根とする派生語の数々、たとえば「いじける」「もたつく」のような動詞や「けばけばしい」「つややか」のような形容詞・形容動詞、さらには「きりきり舞い」のような複合名詞をも扱うべきだろうか。また既にオノマトペ起源であることが意識されないまでに一般語彙化したものを、どこまで視野に収めるべきだろうか。第三に、ある行為や事態に関して用いられる擬音・擬態語のグループも、それらの間で一種の体系をなしており、その内部で個々の語彙を記述することも重要なことだろう。たとえば笑うとか泣くとかいう行為の諸様態を表す極めて多様なオノマトペは、是非とも一箇所にまとめて提示することが望ましい。これらの問題を整理しながら、われわれは未知のオノマトペ辞典に対するたがいに矛盾した要求に調和点を見出さなければならないのだが、この議論はまた稿を改めることにする[注7]。

Octobre 1995.

[注]

1. 英訳された日本文学作品から訳例を収集した『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』(藤田孝・秋保慎一編、金星堂)や、『日本語擬態語辞典』(The Japan Times、五味太郎監修・制作)などがある。
2. この作品は Akutagawa Ryûnosuke: RASHOMON ET AUTRES CONTES (Traduction de Arimasa Mori, Le Livre de Poche, 1969) の巻頭に置かれている。
3. この作品は Kenji Miyazawa : LE COQUILLAGE DE FEU (traduit du japonais par Françoise Lecoeur, L'Harmattan, 1995) の巻頭に置かれている。
4. この用語は、『オノマトピア　擬音・擬態語の楽園』(筧寿夫、田守育啓編、勁草書房、1993)所収、角岡賢一氏論文に従った。
5. 『擬音語・擬態語辞典』(浅野鶴子編、角川書店)所収、金田一春彦氏の「概説」における分類に従った。この分類は前掲『オノマトピア』における分類とも矛盾しない。
6. 『コンコルド和仏辞典』(高塚洋太郎ほか編、白水社)、『プチ・ロワイヤル和仏辞典』(恒川邦夫ほか編、旺文社)、『スタンダード和仏辞典』(鈴木信太郎ほか編、大修館)などを参照。
7. この論文は金沢大学文学部の1995年度前期フランス語学演習の副産物であることを付記しておく。演習では私家版「日仏対照オノマトペ辞典」の作成をめざしながら、既存の日本語オノマトペ辞典における文例の仏訳に悪戦苦闘しただけだった。その経験から、一方でオノマトペ語彙を分類整理してその体系性を示し、他方でフランス語へのその翻訳の方法を網羅して実際上の問題解決に指針を与える、そんな辞典を構想せずにはいられなかった。